

## ジェリービーンズの収穫祭

(a short story inspired by words and photos sent from From Chiang Mai to Nakanojo )

Originally written in Japanese by Kousuke Iizawa (飯沢 康輔)

Japanese to English translation assistant : Misa Kuramoto (倉本 弥沙)

Shin Asato (安里 慎)

English to Thai translation by Wuttin Chansataboot

- This short story is part of “*Cross-Words*”, a multi-media installation by Wuttin Chansataboot •

---

私が中学校に通いはじめた頃、台所で洗い物をしている母親の背中に向かって結婚とはどういうものか訊ねたことがある。異性を意識しはじめたたわいもない好奇心からだ。母は洗い物をする手を止めしばらく黙っていたが、再び手を動かしながら「潜水艦に乗って深い海に潜るようなものよ。」とつぶやいた。母の表情は見えなかったが私は質問したことを後悔した。そして二度とそのことに触れることはなかった。

それから数年後、父はあの病に倒れた。一時は危篤状態になりながらなんとか一命は取り留めたものの意識を取り戻した父は一切の記憶を失っていた。現在も国の指定病院で自分が誰かも分からないまま療養を続けている。定期的に会っている母に父の様子を聞かされるが母の口ぶりはなんだか父の見舞いを楽しんでいるような明るい弾みがある。もしかしたら母はこれまでにない幸せな結婚生活を送っているのかもしれない。

車の座席に身体をあずけながら暮れゆく空を眺めているうちにそんなことを思い出していた。ここの信号はいつも待たされる。とりとめもなく甦る記憶に身をまかせ他はない。

去年、祖母が死んだ。流行病であつけなくこの世を去った。葬儀は制限され簡素なものだった。祖母は若い頃文学を目指していたが生活が苦しく教員になる道を選んだと聞く。子供の頃から私はあまり祖母には好かれていなかったらしく従兄弟達に比べて遠ざけられていたように思う。そんな訳で生前祖母の住むアパートを訪ねたこともなかったが、母と祖母の遺品の整理をするために初めて部屋に入ったときは整然と並ぶ蔵書の数に圧倒されたものだ。しばらく眺めているうちにその本棚には不釣り合いな一冊のアルバムを見つけた。手に取り何気なくページをめくる。誰もいない校舎の廊下や、ブレてほとんど何が写っているかわからないようなものまで何故か丁寧に保存されている。そんな中、一枚の写真に目が留まった。教員になった祖母がまだ新米だったころだろうか、文化祭の様子を撮ったものようだ。若い祖母は生徒に囲まれ黒板の前に立って少しこわばった笑顔でこちらを見ている。それをじっと見つめているうちに不思議な感覚に私は囚われた。この写真の中に流れる時間の延長に今自分は果たしているのだろうか。何か違う気がした。今ここにある時間とこの写真の中の時間は完全に切り離されている。と言うか、ずれている、あるいは重なり合っている気がした。何故そうしたかは思い出せないが私はその写真をアルバムからそとと抜き取るとポケットに入れた。それは今でも携帯電話のホルダーに入れて持ち歩いている。

横を郵便配達員のオートバイがガタゴト音を立てながらすり抜けて行った。紙媒体のメールを愛好する人が専用に使っている郵便システムだ。いつの間にか変わっていた青信号に反応して車が進みはじめる。自動運転が恒常

化して交通事故が格段に減ったが信号による渋滞は解消されないままである。テクノロジーは不完全さと共に進歩する。

季節のない町を抜け出し郊外に向けて車を走らせた。特に目的地はないのだがこの五年の間に N 県と G 県の境に二回オーロラが観測されたのは調度この時期だと聞いたので思い立って出かけてみることにした。

学者達によると地球は再び氷河期の入口に差し掛かっているらしい。北極と南極は双子のように揃って氷の範囲を広げているのはそのせいなのだろうか。確かに、ここ数年夏の終わりが早くなったような気がする。

一時間も走ると信号も立ち並ぶビル群も後方に消え去り、代わって遠い山々の影が視界に広がります。外灯が点灯する少し手前の屋と夜の境、夕闇がそこまで迫る中での運転は程よい孤独感に浸れて悪くない。

自動運転から手動に切り替える。GPS もシャットダウンして気の向くままにハンドルを操作した。カーブの度にチャラチャラと音がする。いつからかダッシュボードに置きっぱなしになっている鍵の束がこすれ合って音を立てている。どこの鍵だったかはとうに忘れてしまったがお守り代わりに放置してある。

少し休憩しようと道路脇に車を止め外に出た。深く息を吸うと湿り気のある香ばしい土の匂いが鼻を抜けた。足下には枯れ葉が数枚舞っている。後部座席に置いたカバンから地図帳を取り出して薄暗がりの中ページをめくる。辞書を創る出版社は未だにあるが地図はもう創られていない。手に入れるにはマニアが時々出品するオークションで落札するのが手取り早い。これは、いつか気まぐれにネットで見つけ購入したものだ。しかし、ここが何処だか調べようとしたが私には地図を読み解く力がまるでないことに気付く。地上には右も左も上も下もないのはどうやってこれを読めと言うのだろう。きっと特別な学習方法が必要なのに違いない。しかし敢えてこうして見ていると地上は記号で埋め尽くせるものなのだとひとり感心して眺めた。一体自分はどこにいるのだろうか。いつもならナビゲーションと自動運転が勝手に目的地に運んでくれる。地図の上に自分がぼつんと立っているのを想像してみた。私は一人だ。今私がここにいることを誰も知らない。ふふっと可笑しさがこみ上げてくる。電灯がぼつりぼつりと灯りだす。少し冷えてきたようだ。車に戻りエンジンをかけ再び来た道走る。

先日、T 大学の研究室が世界で初めてホワイトホールの存在を証拠づける画像の解析に成功したと、テレビのニュースが報じていた。そこでは無限に圧縮された原子の塊がこの宇宙に向けて膨張しながら放出されているという。それが事実なら、この宇宙は最終的に高濃度な重力の塊になるのではないだろうか。そうすると、この宇宙自体が一つのホールになるわけで一体そのホールには何が吸い込まれていくのだろう。その前にお互いの重力でつぶれてしまうに違いない。

辺りはすっかり暗くなり家路を急ぐ対向車のヘッドライトが増え始めた。このままこの道を走らせればいつか県境に差し掛かるはずである。暗闇に浮き上がっては消える看板の隅に決まって五輪のマークが表示されているのが残像となって瞳の奥に残った。

私が誕生した年、T オリンピックは延期になり翌年には正式に中止が決定した。この国は喪失感に包まれ未来への展望が閉ざされままたまった。その後、予定されていたオリンピックは全て廃止され、長い間オリンピックの招致活動は影を潜めた。どの国もそれどころではなくなったからだ。

中東と アジア、アフリカの一部の国を除いた連合国の初代世界大統領に旧スウェーデン出身のトゥンベリ氏が再選を果たし二度目の任期がスタートした。それを機に、アフリカ大陸での初めてのオリンピック大会が 4 年後に開かれる運びとなった。人口の十分の一の命を奪ったあの病への恐怖がいまだ世界を支配する中、それを払拭するための夢の舞台が人々には必要だったのだ。主流の e スポーツやドローン競技の他チェスを始め各国の代表的

なボードゲームが競技として採用されることになった。もちろんリモートで遠隔操作するロボットが選手の代わりにゲーム台の前に座る。

あの世界的なパンデミックからようやく人々は本来の秩序を取り戻そうとしているが、その過程でいくつかの国家は解体、分離、消滅していった。その度に新たな紛争や移民の流出が絶え間なく起きた。人々は疲れ果て恐怖に立ち向かう力を失っていった。そこで政府が人々の感情を管理、コントロールする画期的なシステムを導入した。すると、人々の暮らしに平穏さが戻ってきたかに見えた。秩序とはそもそも与えられるものだったのだ。

ある天文学者が新説を唱え時間が物質であることを予測した。それによると、時間とは素粒子より遥かに小さな粒子で構成され物質でありながら質量は0と言う矛盾をはらんでいる。宇宙はその粒子で満ちていて原子と原子の間に隙間なく溢れ、放射状に時間を発生させているというのだ。時間はその場その場で書き換えられる。決まった過去は存在せず、その都度発生した時間に合わせて過去は組み替えられる。つまり、時間旅行は思うがままと言うことだ。

ふと、最後に食事をしたのはいつだったろうと気になって道路沿いのレストランに車を滑り込ませた。各種昆虫料理の他に淡水魚のコースがメニューを飾っている。私は魚のフライのプレートを注文した。海水温の急激な変化に伴いこの国の近海では不漁が深刻化し、同時にあの病の人から家畜への感染が確認され畜産業に決定的な打撃を与えてから、これまで目が向けられなかった昆虫と淡水魚の養殖がこの国の食卓を支えるようになった。特に南米や東南アジアの大型淡水魚は環境の変化に強く成長も早いいため低コストで合理的な養殖に適していた。この料理が美味いかどうかはともかく口に運んでは咀嚼を繰り返し飲み下した。私は食欲と言うものがよく分らないが食べる行為は生きている感覚を呼び覚ますので日ごろの習慣として行っている。支払いはいつものようにゴールデンアイで済ませた。機械が虹彩を識別し自動決済する仕組みだ。

店を出るときレシートを渡された。今時珍しいことだ。やはり郊外に出るとこう言う意外な出来事に遭遇するので面白い。レシートの数字の羅列の中に物理学的な法則が隠されているのではないかと昔の癖が首をもたげた。この世には偶然はなく全ては数式で表されると大学の教授が言っていたのだ。その教授に傾倒していた当時の私は何かにつけ物事の裏側にある必然を見つけるための謎解きに没頭した。ある日、大学の帰りに壁から垂れ下がる古びた赤いボンを見つけ私にしか分からない暗示であろうと来る日も来る日も沈思したが結局は論理的出口を発見することはなかった。私は世界とまだ繋がりがきれていないのかと失望したものだ。そして出た結論は、出来事は全て思考の外にあると言うことだ。レシートをくしゃりと握りつぶしてポケットにねじ込んだ。

さて、どうしたものか。そろそろ県境、私に設けられた制限区域を逸脱するのも間もなくなのだが、ある記憶が私にささやいてくる、「GO!」と。

ハイヒールは性的蔑視に繋がる極めてふしだらな履物として国連が各国に生産中止を呼びかけた。性の垣根が薄らいだ世間のムードも後押ししてたちまち町から姿を消していった。子供の頃、母のものをこっそり拝借して履いてみたが実に歩きづらく何故このようなものを履くのか理解に苦しんだ。しかしある日、倫理委員会が不健全を理由に閲覧禁止に指定した動画サイトの中から古い映画の一場面を発見したとき私は強い衝撃を受けた。それは酒に酔った女がうつ伏せにベッドに倒れ込んだままハイヒールを脱いで投げ捨てる、と言ったものだった。たったそれだけのことだがこの時代の女性達の心情がこのシーンによってまざまざと表されている気がした。ジェンダーが問題視されることのなくなったこの時代にこのようなものを履く必要もなく酔って倒れ込むこともない。しかし、この動画の中の女性は何かと戦って自分を確立しようとしているように私の目に映り、羨望を覚えずにはいられなかった。

人々が押し並べて均等の人権を与えられ一切の差別はなくなったこの世界は不幸ではないのかもしれないが同時に失ったものもあるのだろう。人は乗り越える壁があるからこそ自ら切り拓こうとする。それをまだ喜びと感じられる時代がかつてはあったのだ。

私は道の先へとアクセルを踏んだ。結果はわかっているがハイヒールを履く自由もあるような気がしたからだ。

N 県に差し掛かろうとした、その時、突然私の車は目も眩む光に遮られた。ブレーキを踏み、かざした手の隙間から前方を見ると道路に浮かんだ物体が車の行く手を阻んでいる。けたたましい警告音が鳴り響く。やっぱりか、予想はしていたが軽い落胆に襲われた。わずかな希望もあるにはあったからだ。希望、今更一体何を。目の前に浮かぶ大型の物体は私に埋め込まれた個人識別チップが呼び寄せた近隣のパトロール用ドローンなのだ。

私は今妊娠している。もちろん、相手の顔も素性も知らされていない。国が推奨する人工受精を行い純正の人間の子を宿した。結婚という制度はまだ残っているが、あのことがあってからそれを選択する人は希である。その代わりに、子供を国の機関が育てるという新しい政策が始まった。代理出産すると国から家や生活費が保証される。生まれてくるこの子は国が審査した家族のもとで育てられる。

戸籍上の私の名前はナオミ・T、しかしもうひとつ、国の機関に登録された名前がある。それは製造番号 covid-42n.J2020.F303 型 C。

私はドローンに合図を送ってからゆっくりと息を吸い祖母の写真を取り出した。祖母の写真の中の時間の流れでは、あの T オリンピックは開催されたのであろうか。デジタル画像と違って紙の写真はそのものが時間の中にある。祖母の笑顔が揺らいだように見えた。

ドローンの誘導に従い車を U ターンさせ元来た道に戻ると自動運転に切り替えた。「なるほど、潜水艦か…。」母はあのと、自分では抗えない運命のことを語ったのかもしれない。

振り返って遠く夜空を見た。飛び去るドローンの向こうには暗闇だけが広がっている。この国のオーロラに出会うにはどうやら季節外れだったようだ。

.....

Please scan the QR code below for more information about “Cross-Words”.



[www.WUTTINCHANSATABOOT.com / crosswords /](http://www.WUTTINCHANSATABOOT.com/crosswords/)